

## 鎌倉下向僧の研究——願行房憲静の事跡——

高橋 秀 栄

## 一

治承四年（一一八〇）のころ、辺鄙にして海人野叟のほか卜居の類すくなし（吾妻鏡）という状況であった鎌倉の地が歴史上の舞台として一躍脚光をあびるようになったのは、いうまでもなく源頼朝がその他に武家政治の府を定めてからのことである。頼朝はそこが父義朝にゆかりの深い地であることを重視して幕府を置き、新しい都市づくりをめざしたのであったが、政治、経済はもちろんのこと文化、学問、芸術の分野においても有為の人材を当時の鎌倉内に求めることはできず、鎌倉以外の地にその適任者を求めていたことが『吾妻鏡』の記載から知ることができる。そのことは宗教の分野においても同様であった。例えば、鶴岡八幡宮は石清水八幡宮を勧請し、鎌倉の守護、武家の霊場として創建されたものであるが、その社壇で営まれる法会や行事に仕える別当や僧の補任に際しては、遠く伊豆の走湯山や上総国にまで人材

をさがし求めていたほどである。また義朝追善のために建てられた勝長寿院や、義経・義仲らの鎮魂のために造営された永福寺での各種の法会も、三井寺の公顕僧正の下向をまっぴら行なわれるという有様であった。その後、鎌倉武士の信仰受浄土、容にもなつて、天台、真言、浄土、戒律、禪の各宗派の教えが鎌倉の地に伝えられたわけであるが、その伸展を担当した人々こそ、ほかならぬ京都・奈良方面から鎌倉に下ってきた、いわゆる「下向僧」たちであったのである。鎌倉時代の仏教史上にその名を知られた下向僧としては、栄西・公胤・道元・明恵・俊菴・良忠・忠快・叡尊・忍性・聖覚・道教・憲静・宏教らがいる。彼らが鎌倉をめざした目的や事情は各々に異なるが、鎌倉新仏教の創唱とその定着をめざし、あるいは旧仏教の覚醒と復興とを使命として、鎌倉入りした足跡は十分に注目すべきである。

今回は鎌倉時代の中期刊、鎌倉に下向した東密僧・願行房憲静に視点をあててみたが、鎌倉地方における仏教の形成

と展開に寄与し、多彩な足跡を残している他の下向僧の勝跡を個別にさぐってみることも、鎌倉仏教の特質をさぐる上で、充分に意義のあることと思われる。

## 二

願行房憲静は建保三年、美濃源氏の流れをくむ木曾の武士の家に生をうけたが、幼年にして仏門に投じ、泉湧寺の月翁智鏡について北京律の戒法を学んだあと、意教上人頼賢の膝下に親参して東密の密旨を学んだ、いはば戒律と東密の兼学僧であった。

その事跡は『沙石集』『金撰集』『東寺大塔升形銘』『東宝記』『東寺王代記』『鎌倉鷲峰法流伝来記』『法水分流記』『血脈類集記』『密宗血脈鈔』『野沢血脈集』『鎌倉日記』『新編鎌倉志』『律苑僧宝伝』『本朝高僧伝』『伝灯広録』『浄土伝灯総系譜』など、各種の僧伝、史書、紀行、地誌の類に婁々記述されている。これらの中で古くから多くの人の眼にふれ、また人名辞典や百科事典に載せる場合の典拠とされてきたものは『律苑僧宝伝』と『本朝高僧伝』所収の小伝である。しかし、前者の伝中には、房号をおなじくする浄土僧の願行房円満（安養院開山、建治二年没）の行実が混同されている可能性がきわめて濃く、それをもとにして憲静の人となりをさぐるときには十分な注意が必要である。

ところで、憲静はその修学時代を京都ですごしたのであるが、壮年期には鎌倉に下向、真言密教の布教を使命としていたことが知られる。鎌倉にいつ下向したか。一般に、『伝灯広録』を典拠とする文永の初め、意教上人に随伴して下向したとの説が採られているが、それは誤りのようである。なぜかといえは憲静は、文永元年の前年にあたる弘長三年二月にはすでに在鎌し、八十二才になる寛位のもとで真言の事相書を書写しているからである。また、一方の意教上人は文永元年六月五日にはまだ高野山安養院にあって、事相関係の書物を安運という僧に写させていることが金沢文庫の資料によって確かめられるからである。

憲静の在鎌期間は弘長三年（四十九歳）から正応三年（七十歳）までの廿八年の長きに亘っている。その間、京都と鎌倉とを幾度か往還することはあったと推察されるが、彼が人生の後半生は鎌倉を舞台にしていたことは疑いない。それは彼が生存中に『願行上人』『憲静上人』と敬称されたほかに『二階堂上人』『永福寺真言院上人』とも尊称され敬慕されていたことから類推できる。

## 三

次に在鎌中の主だった事跡を年を追ってみていくと次のような活躍ぶりが知られる。紙数の都合上、ここでは箇条書に

記すことにしたい。

○弘長三年——文永年間

二階堂永福寺真言院、経師ヶ谷寛位房、観音寺などで東密の事相書を書写。

○文永六年三月十二日

称名寺灌頂道場にて法光房了禪に両部灌頂秘印を授く。

○文永八年一月十七日

称名寺開山の妙性房審海に伝法灌頂阿闍梨位を授く。

○文永十年

異国降伏のため兩界不断の秘法を始行。自ら不動明王像を  
図繪し、百口の禅侶に祈念せしむ。

○建治二年五月廿五日

称名寺灌頂道場にて性慧に両部灌頂秘印明を授く。

○弘安二年

東寺大勸進に補任。八月廿日東寺五重塔の造営を始む。

○弘安四年

東寺五重塔の心柱を立てる

○弘安八年一月八日

称名寺の審海に『灌理鈔』(憲静の秘本)の書写を許す。

○弘安九年

大山寺にて曼荼羅供法会が営まれる。

○正応二年

定仙に題未詳を授く。

○正応三年

二階堂にて長承元年灌頂記を書写。

○年時不詳

(イ) 丈六地藏尊を買い求めて二階堂の堂宇に移す。

(ロ) 理智光院の開創

(ハ) 鉄造不動尊を大山寺に安置

(ニ) 貞時の治病の加持祈禱

(ホ) 鶴岡八幡宮の築地修理

#### 四

ところで、憲静が鎌倉に下向した目的はなんであったのだろうか。幕府為政者の宗教政策上の要請にこたえるものであったのか。あるいは泉涌寺開山の遺風(北京律)を布めるためであったのか。さらには意教上人のもとで究めた東密の信仰を隆んにするためであったのか。いくつか推測することはできるが、真の目的は不明である。ただし、右に示した鎌倉中の事跡からみる限りにおいては、泉湧寺門徒として律法を興すというような活躍がみられるばかりである。ひとえに東密僧としての活躍がみられるばかりである。ちなみに、憲静の活躍が西大寺叡尊が北条時頼・実時の懇望に応えて一夏の布教活動を終えて帰洛した半年後にみられることは注意す

べきである。ことに北条実時の創建した称名寺で二度三度、伝法灌頂の法筵をもうけていることは、北条実時と憲静との間に親交があったことを暗示させるものである。断定はできないが、憲静の下向は叡尊帰洛後の欠を補なうべく、幕府の上層から要請されたものであったかも知れない。

## 五

最後に憲静にみる下向の意義について考えてみたい。簡単に結論をわり出すことはできないが、①文永年間に炎上焼失をみた東寺五重塔の再造営をなしとげたこと。②高野山の堂舎を修理するとともに、高野山に絶えていた結縁灌頂の儀式を復活させたこと。③意教上人の法脈を関東の地にひろめたこと。などの大きな成果はいうなれば鎌倉下向による布教活動が実を結ばせたものであるということはできよう。ことに五重塔の復興にあたっては、意教上人からの助援や勧めもあったが、それ以上に鎌倉の為政者の外護を得たことが大きな収穫であった。北条時頼、時宗、貞時、実時、二階堂氏らの絶大な外護と支援によってその大事業は推進され、完成をみたといっても過言ではない。東寺五重塔の再造営につくした憲静の功績に関しては、網野善彦氏のすぐれた論文<sup>5)</sup>があるが、彼が当時すでに「東寺ノ大勲進」あるいは「東寺上人」として名声を博しえたのも、また後世の僧伝・地誌等にその名を残しえ

たのも、その由縁はその功に求められるものと考えられる。勿論、憲静自身、学徳ともに深く身にそなえ、重源・栄西・行勇・忍性・順忍らに乏らぬバイタリティな行動力で、あの大事業の任に奉じたからではあるが、もし鎌倉に下向することがなかったならば、その完成の実現は不可能であったに違いない。幕府の有力な武家たちの支援にもあずかれず、東寺のみならず、高野山の堂宇の修理すら期待できなかったかも知れないのである。憲静にとって一世一代の大事業であった東寺五重塔の再建や高野山の修理は、換言すれば、弘法大師にもっともゆかりの深い名刹を後世に存続させる歴史的意義をこめた大事業でもあったのである。

1 古くは水戸光圀が『鎌倉日記』（延宝二年）の中で指摘しているが、故宮崎円遵氏は「建治二年に寂した円満が文永に焼けた東寺を修造する筈なく、弘安の頃関東を往來している筈もないのであって、両者は明らかに別人とみるべきであろう」（『称名寺と浄土教』龍谷学報三〇九号昭九）と指摘され、最近では提禎子女の史の詳しい研究論文がある。女史の考証によれば、天文ごろまでの史料でみる限り、同じ房号を持つ憲静と円満の伝が混同するようになったのは『律苑僧宝伝』の記載あたりからではないかと思われる、と指摘されている。（『茨城県立歴史館報10号』）2 文永初、意教応三鎌倉之請、赴関東。憲静踏弊履供奉云々。ちなみに故榑田良洪氏は『伝灯広録』の記述は杜撰の評を免かれ難い」と指摘されている。3 『仙芥集』に「願行上人云意教上人、阿性上人、兵部卿法印、三人之真言無相法門皆同也」とある。この中の兵部卿法印とは寛位のごとで、弘長三年当時経師谷に住んでいた長老である。4 『血脉』5 東寺修造事業の進展（『中世東寺と東寺領荘園』所収）（金沢文庫主任学芸員）